



育てた稚魚を放流。4年後に帰って来てねと、願いを込めます

4月19日、輪厚川河川敷・親水広場で第6回目の放流式が行われました。みらい塾など4団体と7家族の里親が稚魚約1000匹を放流。昨年10月、輪厚川と親しむ会が主催した「輪厚川での釣り体

毎年、北広島青年会議所が主催してサケの稚魚の放流が行われています。同会議所が創立30周年を迎えた平成21年、市内に流れる輪厚川に放流することで、市民の方に郷土愛などを感じてほしいと企画しました。卵は、恵庭の「さけます・内水面水産試験場」から譲り受けます。その後里親に渡し、12月から5カ月間育ててもらいます。卵からふ化するのが1月上旬で、生まれたばかりの稚魚はおなかに抱えた袋（卵のう）から栄養を取って成長。卵のうがなくなつてから餌を与え、大きさが約5cmになる4月中旬まで育てます。

「会議所では、この放流を継続させるため、一緒に楽しみながら協力してくれる方を募っています。サケが戻ってくることを信じ、命の大切さや川の環境に少しでも関心を持ってほしいです」と理事長の米内勇さん。皆さんも秋になったら輪厚川をのぞいてみませんか。サケの姿が見られるかもしれません。



川へ向かう里親の皆さん



輪厚川河川敷・稚魚の放流

サケを呼び戻そう！



「験」のときに、サケが目撃されたと言っていた里親の皆さんは、目を輝かせていました。愛情を持って育てた稚魚をそつと紙コップに移し、思いを込めて川に放します。子どもたちは「戻ってくるかな？ 元気で帰って来てね」と期待に胸を膨らませます。

里親の古内満さんは「水を取り換えるときは冷たくて大変でしたが、孫と2人で世話をして楽しかったです」と話してくれました。「今年も120匹育ちました。来年も参加したいです」と孫の旭さんもうれしそう。

まめ記者

地域と共にある学校づくりを自らの手で...



西部中学校3年 西村祐人さん (生徒会長)

西部中学校はユネスコスクールやコミュニティスクール等の指定を受けているため、生徒会執行部では、それらを考えた活動を行っています。その一つがカボチャ栽培です。種から育てて収穫する活動を通し、農業などの文化や地域の方との関係を未来につなげていくことを目指しています。カボチャ栽培活動の象徴として、イメージキヤラクターやカボチャをもとにしたオブジェなどもあります。

他にも福祉に関する授業や、小・中学校合同でのあいさつ運動も行っています。私たちの学校では、あいさつをする意識向上の活動も盛んです。生徒会のあいさつ運動はもちろんです。生活委員会でも実施しています。全校生徒のあいさつへの意識向上、礼儀を確認するために努力しています。

今後、さらなる学校の発展を目指して、生徒会や委員会、全校生徒で努力していきます。



全校生徒がカボチャを収穫する様子